

放 射 線 科

1. 放射線科の紹介

【当科の基本方針】

① 愛媛から世界に発信する ② 地域医療に貢献する ③ 明るく、楽しく、実力のある放射線科
→よく学び、よく働き、おおいにリフレッシュ!! ワーク・ライフのバランスをサポート
放射線科の業務内容には、**画像診断**、**血管内治療**、**放射線治療**があります。画像診断の中にも XP、US、CT、MRI、RI など多岐にわたります。

画 像 診 断	血管内治療	放 射 線 治 療
画像を通じて患者と向き合い、主治医からの臨床情報と画像から得られた所見で最適な画像診断を行います。画像診断レポート作成のみならず、超音波検査、透視造影などで実際に患者に接して検査業務を行う機会も多くあります。	カテーテルなどを血管内に挿入することで体を切り開くことを行える治療です（下図）。様々な疾患が対象となりますが、放射線科で扱う疾患としては直接化学療法の薬剤を注入する肝細胞癌の動注化学療法、出血に対する塞栓術などがあります。	臓器温存を目指すピンポイント治療から化学療法などを併用した進行がんの治療まで、高精度放射線を使ったがん治療を行います。腫瘍治療には手術療法や化学療法を併用した集学的治療もますます増加しており、放射線治療はチーム医療における重要な一翼を担います。



画像診断と画像を用いた様々な低侵襲治療は現代医学の中で最も進化した領域です。放射線科医はその中心的な役割を演じることの出来る魅力的な診療科です。画像診断は診断機器の急速な進歩もあり、まさに日進月歩で、「病気が画像で見える」時代になりました。放射線治療も 1mm の精度でターゲット（がん）に線量をより集中させる高度の放射線治療で、「がんを切らずに治す」時代になってきました。各診療科を超えた存在である

Doctor's doctor としての放射線科医は欠くべからざる存在と

なっています。さらに、放射線治療や IVR は低侵襲治療分野における最先端としてますます重要な役割を担うようになっていきます。放射線科は女性医師がキャリアと家庭を両立させながら安心して働き、最前線の医療に関わり続けることも可能です。現在、妊娠出産を経て最前線で働き続ける女性医師がたくさん在籍しています。当科では育児・復帰支援を全面サポートし、労働時間や業務内容については柔軟に対応します。近年、県内でも**遠隔画像診断システム**が設立され、様々なライフスタイルに応じた勤務態勢が可能となってきています。放射線科を目指すことは、**仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）** の上で大きな選択肢となります。現在、同門の放射線科医として、最前線で地域医療に貢献する医師が約 100 名程度いますが、放射線科に対する需要は増加し続け、魅力的な診療科であり、将来的にも画像診断および放射線治療は臨床医学の基盤領域になる診療分野です。最後に、放射線被曝については全員が年間平均自然被曝量 (2.4mSv) の半分以下であり、安心・安全を保障します。

2. プログラムの目的と特徴

放射線科には、大きく画像診断、放射線治療といった 2 つの大きな専門領域があります。**専門研修の 3 年間は、放射線科医師としてこれら両方の専門領域について、まんべんなく知識を習得し、画像診断・**

放射線治療すべての基礎・臨床を学ぶことを目指します。なお、専門研修の初年度では、特に放射線科医としての基本的事項を理解し、安全な医療行為が行えるよう研修していきます。

3. 経験目標

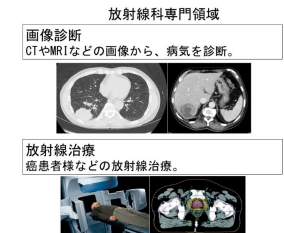
画像診断、放射線治療すべての基礎・臨床を学びます。

4. 研修に関する行事

- 日常の教育症例カンファレンス・研修医レクチャー
- 医局抄読会・症例検討会
- 各科との院内カンファレンス（循環器、呼吸器、消化器、泌尿器科など）
- 他施設とのカンファレンス（愛媛放射線科医会、県中呼吸器カンファ、道後腹部カンファなど）

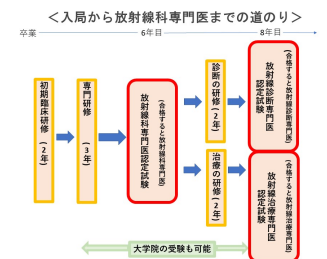
5. 指導医や指導体制

教授・診療科長	城戸輝仁	循環器画像診断
准教授	宮川正男	核医学診断
准教授	倉田聖	循環器画像診断
講師・医局長	松田恵	腹部画像診断
講師	城戸倫之	循環器画像診断
助教	田中宏明	血管内治療 (IVR)
助教	上津孝太郎	放射線治療
助教	川口直人	循環器画像診断, 核医学診断, IVR



2. 新専門研修プログラムについて

当科では、右図のように、初期臨床研修（2 年間）終了後、専門研修（3 年間）を完結し、専門医試験合格を目指します。3 年間の専門研修では、1 年目、2 年目、3 年目のどの期間を専門研修基幹施設と専門研修連携施設での研修を行うかにより、6 コースが設定されています。いずれのコースも、研修期間の 3 年間のうち 1 年間は専門研修基幹施設を、2 年間は専門研修連携施設で研修できるように設定されています。大学院への進学は、初年度、2 年目、3 年目のいずれの時期にも可能です。臨床研究での学位取得が可能ですので、専門医と博士号の取得を同時に目指すことが出来ます。研修中に大学院へ進学した場合、基本的に日中は各施設での研修をフルタイムで行い、午後 5 時以降、大学院講義出席、臨床研究、論文作成等を行い、大学院で医学博士号取得を目指すことになります。



3. 連携施設について

当科の連携施設は、愛媛県立中央病院、国立病院機構四国がんセンター、松山赤十字病院、市立宇和島病院、松山市民病院、愛媛県立今治病院、済生会今治病院、愛媛県立新居浜病院、済生会松山病院の合計 9 施設あります。優秀な指導スタッフが所属する十分な教育体制のある施設で研修し、実力向上を目指します。

4. 専門研修の問い合わせ先

愛媛大学医学部放射線科 TEL: 089-960-5371, FAX: 089-960-5375

radiology@m.ehime-u.ac.jp

診療科ホームページ <https://www.m.ehime-u.ac.jp/school/radiology/http2005/>

